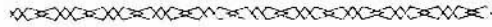


フィリピンの海底



フィリピン紀行

中 柄 博



7109の島からなるフィリピンは、年平均気温が27度摂氏という熱帯の国である。そこには、熱帯特有の植物が生い茂り、サメやコーラルフィッシュの泳ぎ回る海が有る。

サンゴ礁の状態から述べていくと、それは奄美附近の沖に白波の立つリ

ス・アソシェイション (PSDA) の人と共に車で発ち、バタンガス州のバラヤン湾に行った。このアニラオという漁村には、PSDAのクラブハウスがある。

もっとも、クラブハウスといっても、ヤシの木が茂る中に立つ、高床式の戸も無いほっ建て小屋であった。3月15日ここを出発するまでは、ここが我々の宿舎である。11日の夜、食事を取った後、PSDAの連中と私はクラブハウスの前の海へ初めての潜水に出かけて行った。夜間潜水は今までやった事がないので、多少不安はあったが、一たび海に入ると怪しく光る夜光虫の美しさに魅せられてしまった。水中フラッシュが心もとないものだったので、夜の海底が見えなかったのは残念だった。翌朝ピストルを撃つ音に起こされ、PSDAの人と共に舟を借りて潜水に出かけた。そこにいるコーラルフィッシュ、ツノダシ、チウチウオ等は奄美の海と大した変りはないみたいだった。少し失望の念にかられ、だらけていた私の背後に、黒い物体が近寄って来た。サメだ！一瞬私はぞーとした。初めての出会いだったので、写真を取る余裕さえ無かった。

その日の夕方、PSDAの人々は帰ってしまい、

ーフが有り、そこを出ると急に深くなっている形のものではなく、海岸から徐々に深くなり、そこに枝サンゴ、テーブルサンゴが群生している形のものであった。またアボ島においては、サンゴ礁の隆起がかなり見られたが、それも海面に顔を出すものではなかった。

我々は、バタンガス・アボ島・ハンドレッドアイランドと行ったが、順を追って述べる。3月11日マニラをフィリピン・スポーツ・ダイバー

残った我々3人は、夕やみがしのび寄るにつれて淋しく又、恐かった。

翌朝からは、1日20ベソ(約2000円)で借りた舟を使用して、バラヤン湾一帯を潜水した。ここバラヤン湾においては、タンクは1回使用したきりで、ほとんど素潜りであった。写真も魚類を中心に1日カラー2本、白黒2本のペースで取った。

15日の朝、我々はこのクラブハウスを発ちルセナに向かった。アニラオからジブニー(ジープを改良した乗合自動車)でバタンガスに向かい、そこからルセナに行く予定であったが、ルセナ行きのバスに乗ろうとした時、3人の若い警官に呼び止められ、パスポートの提示を求められた。パスポートを見ながら警察署に連行し、色々と質問をした挙句、「戦時中、日本軍が多くのフィリピン人を殺したので、まだ日本人をうらんでおり、3人で行動するのは危険だ。すぐマニラに帰れ」と言った。そんなわけで、ルセナには行かずそのままマニラに向い、2・3日市内見物をした。

3月22日再びPSDAの人々とバラワン島の北、アボ島に向けて船で出発した。14時間の航海は長く感じられ、一刻も早く泳ぎたかった。白い灯台がボンと立つだけのアボ島に着き、飛び込もうとした時、サメが背ビレを水面に出しながら、船の周囲を泳ぎ始めた。魚つりを始めたため、寄って来たのだと思うが、この後も周期的にサメが、寄って来た。襲っては来ないけれど、黒い体のサメを見ると何となくいやなものだった。

ここには隆起サンゴの発達が見られ、変化に富んだ海底をしていた。特にサンゴ礁の穴の中には魚類が多い。

私と高橋氏がサメを追って、シャッターを切っていた時、タタミ2枚分もあろうかと思われる糸巻エイが現われた。その口は、人の頭がすっぽり入ってしまうほど大きなものだ。初めて見るこの怪物にびっくりした我々は、サメと間違え、一目散に逃げた。今思えば、残念なことである。

翌日、途中バラワン島に上陸した後、マニラに向い25日の朝再びマニラに着いた。

この後、バギオを経て、タグバン近くの、ハンドレッド島に行ったが、ここは、きのこのように形をした島が、名前の通り沢山重なり合っており、景色はよいが、サンゴは死滅しており、ダイビングには適さなかった。

この合宿は、沈船調査を目指したものであったが、それは、失敗した。

その原因をさぐってみれば、色々有るであろうが、第一に正確な資料の少ない事、3人という少人数では、充分活動出来ない(治安が悪い為)事があげられるであろう。しかしながら、それ以上に、私達の努力が足らなかった事は私自身深く反省している。なお、今後、フィリピン方面に出る者にとって、多少なりとも資料は有るので、最大限利用していただきたい。

なかつか・ひろし(経済学部学生)

